

令和3年度  
 県南教育事務所重点施策に関する  
 調査結果について(中間まとめ)

学校教育課通信

令和3年11月9日(火) 第170号

編集・発行: 県南教育事務所 鈴木 正和

令和3年度の中間調査結果から、各校から出された成果と課題を各項目の下段に記載しました。自校の調査結果と比較しながらご覧いただき、学校経営に生かしていただきたいと思います。調査へのご協力ありがとうございました。最終調査は1月末に行う予定です。(○成果 ▲課題(今後に向けて))

1 道徳教育・教育相談体制への支援 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1) 道徳教育の充実	①	児童生徒の実態に応じた別業を作成し、重点的に指導する内容項目について教職員間で十分に共通認識が図られている。	/	3.0	2.9
	②	多様な思いや考えを引き出すための発問構成を工夫するとともに、目的に応じて効果的に話し合いが行われるよう工夫している。			
(2) 教育相談体制の整備	③	児童生徒のニーズに応じた心のケアのため、保護者やSC、SSW、関係機関との連携を密にした教育相談体制が整っている。	/	3.3	3.4
	④	アンケートや教育相談を通して児童生徒の不安や困りごとを把握し、いじめの認知や不登校の予防や改善に努めている。			
学校の成果と課題	○道徳教育推進教師がリーダーシップをとって模範授業をしたり、道徳通信を定期的に発行したりしていることで、先生方の道徳科の授業改善への意識が高まってきている。(小学校) ○道徳科の互見授業の機会を複数回設けることができた。(小学校) ○小規模校であるが、教科担任制を一部取り入れたことにより、チームとして生徒指導対応ができるようになってきている。(小学校) ○保護者からいじめアンケートをとることで、学校では知り得ない情報を得ている。(小学校) ○毎月、困りごと調査を実施。早期発見・対応をし、早期解決を目指している。(中学校) ○生徒指導機能を生かした授業力・学級経営力の質的改善を図っていききたい。(小学校) ▲担任だけではなく、全校道徳やローテーション道徳を試していききたい。(中学校)				

2 健康課題の解決への支援 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1) 体力の向上に関する取組の充実	①	【幼稚園】「幼児期運動指針」を踏まえながら、全職員で共通理解を図り、取組を行っている。 【小・中学校】「体力向上推進計画書」について、全職員で共通理解を図り、取組を行っている。	3.2	3.2	2.9
(2) 食育の推進	②	「食育全体計画」に基づき、組織的に食育に取り組んでいる。	/	3.5	3.3
	③	食育の授業を実施した学級の割合(該当学級数 / 全学級数)			
(3) 健康教育の推進	④	健康教育推進のため、自分手帳を活用している。	/	3.0	3.0
	⑤	肥満度50%以上の児童生徒数 *直近の調査			
	⑥	肥満度50%以上の児童生徒のうち、肥満の改善を目指した個別指導を行っている児童生徒数 ※肥満度50%以上の児童生徒がいる学校のみ回答			
	⑦	【幼稚園】全歯(乳歯+永久歯)う歯処置完了数 名/う歯有病者数 名 【小学校】全歯(乳歯+永久歯)う歯処置完了数 名/う歯有病者数 名 【中学校】永久歯う歯処置完了者数 名/う歯有病者数 名			
学校の成果と課題	○チャレンジカードを活用した固定遊具遊びは効果があった。(幼稚園) ○体組成計を用いた身体計測を実施したことで、より詳細なデータを保護者に示すことができた。その結果、1学期に肥満傾向だった児童数名が標準体型に改善した。(小学校) ○コロナ禍ということもあり、手洗いや消毒、換気の意識が高くなった。(小学校) ○食育については計画や内容について随時給食センター職員等との連携をとって進めている。(中学校) ○個別指導により、肥満傾向に改善がみられた生徒がいる。(中学校) ▲偏食や食生活の乱れがみられる。家庭や地域社会の教育力低下の影響があるのではと感じる。(幼稚園) ▲自分手帳の活用における年間サイクルと食育を含めた教科との関連を図りたい。(小学校) ▲メディアコントロール関係も含め、保護者への効果的な呼びかけ方が課題である。(中学校)				

3 学級・授業づくりへの支援 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
※学力向上に係る取組等についての調査によるものとする					
(1) 学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの確立	①	全国学力・学習状況調査において自校採点を行い、児童生徒の課題を明確にし、課題を解決するための具体的な方策を検討し、全職員で取り組んでいる。	/	3.1	2.3
	②	ふくしま学力調査において、伸びた子どもの学習方略や非認知能力の変化、担任(教科担任)の指導等を分析し、良い取組を職員間で共有している。			
	③	全国学力・学習状況調査やふくしま学力調査の分析結果をもとに、年間指導計画の見直しを図ったり、授業改善の視点等を再検討したりして、全職員で取り組んでいる。			
(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善	④	児童生徒が互いに認め合い、高め合う学習集団づくりに取り組んでいる。	/	3.4	3.3
	⑤	ふくしまの「授業スタンダード」や授業スタンダード「チェックリスト」を効果的に活用した授業改善(特に「まとめと振り返りの充実」)に取り組んでいる。			
	⑥	児童生徒の資質・能力を育成するために、授業においてICT機器・1人1台端末を効果的な場面で活用している。			
(3) 「確かな学力」の向上を支える基盤づくり	⑦	スタートカリキュラムや異なる校種間での授業研究会の実施など、幼・小・中・高の学びの円滑な接続を意識した取組を行っている。	/	3.5	3.3
	⑧	家庭学習スタンダードを自校化したしたり、それを見直したりするなどして、児童生徒の望ましい学習習慣や生活習慣の確立に努めている。			
学校の成果と課題	○全国学力・学習状況調査を全職員で採点・分析したことにより、各学年でどのような資質・能力を身に付けていかなければならないかということを系統的に考えることができた。(小学校) ○ユニバーサルデザインの考えを取り入れた授業づくりや学びに向かう学習集団づくりについて、一人一授業を行い、事後研で共有するだけでなく、日常的に教員間で授業づくりや有効な手立てについて話題にする機会が増えてきている。(小学校) ○学級づくりを重点に指導にあたってきたことで、お互いの考えを認め合いながら話し合い活動ができるようになってきた。(小学校) ○授業における思考の練り上げや振り返り時にタブレットを活用したことにより、授業終末時のまとめ、振り返りで効果があり、生徒の表現力育成につながっている。(中学校) ▲成績が伸びた児童の学習方略や非認知能力の変化について、隣接学年間では共有しているものの、全体というまでには至っていない部分が多い。共有できる話し合いの時間を設定する必要がある。(小学校) ▲授業の進度差や習熟度差を縮めるための活動や学習をさせたいが、日常的にまとまった時間をとることが難しい。(中学校)				

4 特別支援教育の充実への支援（数値目標3.5）			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1)	地域におけるインクルーシブ教育の促進と理解啓発の促進	① 「個別の教育支援計画」および「個別の指導計画」を作成し、情報の共有や進級・進学時の引継等に活用している。 *作成する対象は、配慮や支援を必要とする児童生徒全てです。	/	3.5	3.3
		② 障がいのある児童生徒一人一人の実態に応じた、障がいのない児童生徒とお互いが認め合える交流及び共同学習を実施している。 *特別支援学級のある学校のみ回答	3.4	3.5	3.3
(2)	幼児教育、小・中学校、高等学校における特別支援教育の充実	③ 特別支援教育コーディネーター等を中心として配慮や支援を必要とする幼児児童生徒の支援策の検討と共有化を図り、役割を明確にして支援を行っている。	/	3.2	3.0
		④ 全教職員に特別支援教育の理解を図るための研修や役割に応じた専門性を高めるための研修など、計画的に特別支援教育に関する校内(園内)研修を行っている。	3.3	2.9	2.7
<p>学校の成果と課題</p> <p>○就学指導を含む校内特別支援委員会を設置し、組織的に取り組めるように体制を整えてきた。(幼稚園)</p> <p>○支援員を専属的に配置し、安全面に配慮した手厚い保育を行っている。日ごとに集団生活に適応する姿が見られるようになった。(幼稚園)</p> <p>○校内支援体制を整えて組織で対応することができている。(小学校)</p> <p>○就学指導を進める際の保護者へのアプローチの仕方についての研修が大変役立った。(小学校)</p> <p>○生徒の様々な困り感や生きづらさについて、教師の理解促進を図るため、特別支援教育コーディネーターが定期的に図書や参考文献の回覧をしている。(中学校)</p> <p>○特別支援教育コーディネーターを中心に、通常学級においても支援を必要とする生徒の個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、共有をしている。(中学校)</p> <p>▲園児の困り感を保護者へどのように伝えたらよいか今後の課題である。(幼稚園)</p> <p>▲通常学級に在籍している支援を必要とする児童生徒への対応について、研修を深めていく必要がある。(小・中学校)</p>					

5 学校教育を支える基盤への支援（数値目標3.5）			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1)	教職員の勤務・勤務の確立と適正な人事管理	① 教職員人事評価について、全教職員が理解し、適切に運用している。	/	3.5	3.4
		② 教職員組織を生かして働き方改革を推進し、職場環境の改善に努めている。	3.0	3.1	3.0
(2)	学校事故防止の徹底と不祥事の絶無	③ 校内服務倫理委員会に、工夫改善を加え、効果的な取組としている。	/	3.3	3.1
		④ 「信頼される学校づくりを職場の力で」を活用している。	/	3.6	3.5
(3)	開かれた学校づくりと関係機関との連携強化	⑤ 地域住民・保護者が、学校の経営方針について理解できるよう広報に努めている。	3.2	3.4	3.1
		⑥ 学校評価を適切に行い、その結果を公表している。	3.6	3.0	3.2
		⑦ 関係機関との連携に努めている。	3.6	3.6	3.4
<p>学校の成果と課題</p> <p>○職員会議で、事故防止や信用失墜行為に触れて意識を高めてきた。(幼稚園)</p> <p>○学校事故や不祥事防止について自分事として捉えていけるよう、輪番制で話題提供を行いながら、校内服務倫理委員会を設置している。(小・中学校)</p> <p>○職員同士が常に声を掛け合って、仲間意識を醸成し、風通しのよい職場づくりに努めている。(小・中学校)</p> <p>○教職員の交通事故防止に向け、警察署の方にご講話をいただき、意識を高めることができた。(小学校)</p> <p>○ヒヤリハット経験を共有している。(中学校)</p> <p>○交通事故対応シートを自動車に備え付けている。(中学校)</p> <p>▲職員の意識が高まる服務倫理委員会の持ち方はどうすればよいか課題である。(中学校)</p>					

6 幼児教育への支援（数値目標3.5）			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1)	保育の質の向上と幼小連携	① 遊びを中心とした、幼児が身近な環境に主体的に関わり、試行錯誤したり考えたりすることができる教育環境を整えている。	3.5	/	/
		② 幼稚園と小学校が保育や授業を参観したり、合同の研究会を設けたりし、互いの教育内容の理解や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の共有に努めている。	3.0	3.0	/
<p>学校の成果と課題</p> <p>○非認知能力や主体性を高めるために園内研修を進めることで、保育者の意識改革、保育の質の向上につなげることができた。(幼稚園)</p> <p>○異年齢交流を活発にしたことにより、一人一人が自己を発揮できるようになりつつある。(幼稚園)</p> <p>○幼稚園が隣接しているので、互いに情報交換している。幼稚園生が小学校にきて、校長や教頭に話したり、小学生と遊んだりすることもある。低学年の担任が幼稚園に行き、課題を共有し、共通認識を持ちながら児童の指導にあたることができた。(小学校)</p> <p>○教育委員会が主催して村の幼稚園や保育園、小学校の1年担任が一堂に会し、幼児教育を学んだり、情報を交換したりする場を持つことができた。(小学校)</p> <p>▲互いの保育、授業を参観したり、就学前の情報交換をしたりすることはできているが、幼児期のおわりまでに育ってほしい姿の共有まではできていないので、もう少し踏み込んだ接続が必要である。(幼稚園)</p> <p>▲小学校の予定や行事を見ているといつも忙しそうなので、幼稚園のために行事を加えてほしいとお願いするのは、ためらってしまう。(幼稚園)</p> <p>▲様々な幼稚園や保育所から児童が入学してくる。まだ合同の研修会を設けるまで至っていない。(小学校)</p>					